

# 矢澤高松寺

小原無學

## 一 古靈場高松寺の草創

高松寺の草創年代は詳かではない。真言古規の寺で往古繁昌した寺であつたと云い伝えられていることは、西大坊跡、東大坊跡、日向坊跡、ならい坊跡、明ヶ沢坊跡、元坊跡の六坊跡が今畑地になつて居るのを見て、その当時盛んであつたことが察せられる。

又この山にある七不思議の名所の一つである一字一石の経塚から掘り出された白磁の瓶は、支那製のもので鎌倉初期のものと思われる点から考へても、少くも平安時代から開かれた寺であつたことが推察される。又享保七年(一七二二)に書かれた花巻古事記に、足利高氏が高松寺に寺領四百石を寄附した墨印を、口内の人が見たとあることも、当時足利氏の勢力下にあつた紫波神領とは云いながら、信はおかれぬが高松寺の繁栄を物語るものとも思われるのである。

## 二 高松寺七不思議の名所

七不思議の名所は一字一石の経塚、綱森、鏡塚、茨岩、志願の窓、男松女松、小鶴ヶ清水の七つで、一字一石の経塚は峯の男松女松の二本の太木の間にあり、大正初年頃誰かに発掘され、底から出た白磁の瓶がその辺に捨てられてあつた。又一寸五分位の平らな小石に、お経の文字一字ずつ書いたものも、その辺に掘り散らされてあつた。その白磁びん珍らしいもので、県誌編纂の方でも鎌倉初期に支那から来たものと見られている。それは高さ八寸口径二寸七分削徑六寸四分

底徑二寸五分のもので、肩の辺に小さい取手の如き飾りが四つ付いている。同じ綱森やまさかり塚からも発掘されやはり中から陶器が出た。綱森からは高さ七寸口径二寸底徑二寸の花瓶形の黒緑色で肩の辺は葉をかけた様に見える、まさかり塚からは高さ二寸五分口径七寸の鉢形青白色のもの、高さ一尺二寸口径六寸底徑四寸の茶色の花瓶形のものが出た。綱森も鏡塚も高松山の太木を切り倒す時使つた綱や鏡を埋めた塚と称したものであるが、実は仏教の真言秘密の霊場として、院政時代からの仏教興隆のため修法を行つた神聖の塚であつたのである。これらの白磁や陶器は現在岩根神社に保管されている。実に古靈場を偲ぶ最も貴重な出土品である。

次に茨岩といふのは昔鏡音堂のあつた処に今は岩根神社が建つて居るが、その向つて左側の崖に大きい穴の尻の如き岩が突き出ているのがそれである。男松女松は男松には男根に似た瘤があり、女松は股に似た穴のある太木である。小鶴ヶ清水は山の麓平屋敷の向うにあつて、桜の古木の根元から湧き清水で、いかなる早魃にも水の減じたことがないと云われている。鶉は桃花鳥とも書き背は灰色で翅の裏は紅色をして居る。桜の初花の清水に映じて紅いのでこの名が出来たのであろうか。

志願の窓は岩根神社から左の方へ少し登ると新らしい小さい鏡音堂がある。その後ろの高い処に志願の窓がある。これは太古の大きな巖が長年月の間に自然

## 四 高松寺を鞍掛に移転す

いつの頃か矢沢村の火の口より山火事起り、それに烈風加わり猛火となつて高松山まで延焼し、胡四王堂一つ残して矢沢山高松山の神社仏堂悉く烏有に歸した。百来榮えて来た高松寺の大伽藍及諸堂諸坊皆灰塵となつてしまつたこと誠に惜しいことであつた。其後幾度となく再興の計画が持ちあがつても機を失してしまい、徒らに年月を経過してさしもの古靈場は荒れに於てしまつた。

さて鞍掛の地に元高松寺の檀家で特志家であり大富豪でもあつた人が、率先高松寺の再興を計画し、地所や金品を提供し、堂塔及佛像等を寄進して、旧檀家に呼びかけたので、何百年と全く荒廃に歸した、高松寺や鏡音堂が鞍掛に移転再興が立派に出来上つたのである。

さて又旧高松の寺跡に再建しないで特に鞍掛の地を選んだ訳は、そこに大富豪があつた外に美人高松女御は鞍掛に出生し(九十翁渡部直吉氏説)元の鏡音堂の本尊十一面観世音は高松女御の守本尊を奉納安置された(花巻古事記)といふ由緒があつたから、この鞍掛に移転再興を決定されたものと思われる。

その再興の年代は天保六年(一八三五)に書いた二郡見聞私記に、高松寺境内に種々られた諸木の樹齡から見て、三四百年前に再興されたと見ているから、四百年前とすれば足利義教の永享七年(一四三五)となり、三百五十年前とすれば足利義尚の文明十七年(一四八五)となる。

然らば再興の主力となつた大富豪は誰であらうか。昔からこの地の口碑に残つて居る、鞍掛山立岩が崩れ

ても柳田の家はゆるがなと云われた柳田家であつたかも知れない。

和賀神貫郷村誌に「高松寺並に鏡音堂を今の鞍掛に移せること何の子細にて何の年に移したる訳を知るものなし」とあるが、以上の事実によつて鞍掛に移転した子細や年代の大家を知ることが出来ると思ふ。

## 五 再興後の鞍掛の高松寺及鏡音堂

鷹尾山高松寺は鞍掛に移転再興以來明治初年まで栄えたが、其間に高松寺に關した記録としては、天正十八年(一九五〇)秀吉が小田原城を攻めた時、それに参加しなかつた領主は皆領地を没収された。神貫郷の領主神貫廣忠も領地を没収されたから、逃げて矢沢館に隠れていた。文祿三年(一五九四)二月広忠高松寺を訪れ四方山の話の序で、住職法印にこの頃よい夢を見たから、花巻城に歸る様になると思ふと云つた。法印はどういふ夢かと聞きかすと、

只頼め真如の道は有がたき  
立歸るべき時ぞ来にける  
という歌を告げられたと答えた。法印当座ではおめでとくと云つたが、広忠帰つてから不吉な夢を見られたと云つた。果して広忠は間もなく卒去された。(和賀神貫郷村誌)

又南部利直の時鍋倉にあつた万福寺を花巻に移し慶長十六年(一六一一)八幡寺と改称軍事要害地であるから、和賀、神貫兩郡の鎮守として軍神愛宕を勧請した。こうして愛宕山八幡寺を開創してから、高松寺をその下に属させたのである。(花巻古事記)

又高松寺では寛文年中南部大源院公の求めにより十六輩渡の絵像を献上しその賞として寺領十石を寄附せられた。(和賀神貫郷村誌)  
高松山にけ一字一石の経塚あり、鞍掛の高松寺にけ

に風雨にさらされて、いわゆる神工天工の彫刻の如く風化形成された実に天下無類の奇岩怪岩であつて、頗る見事なものである。高さ八尺位周囲二間四方位の岩石で、岩の上に笠石を置いた様になつて居り、その笠石と岩の間に小窓があいて向うを覗くことが出来る。而も笠石を支えている細い柱らしいもの二本ある自然石である。当国三十三番の札所十七番の御詠歌に、思ひきや志願の窓に月ぞ十む昔く照す松の葉の露とあるはこれである。

大昔高松山の峯の太木の精霊は諸願成ぜずといふことなく、四方の諸民に崇拝された時天聴にも達して石の鳥居を建てられたことがあつて、其鳥居の跡であるとの伝説はこのことである。

## 三 高松山の太木の跡

志願の窓より峰へ登ると男松女松があり、その間に一字一石の経塚はあり、なお峰依いに頂上に登ると、北方より西方にかけて眺望望遠絶佳で胡四王山はすぐ眼下に見おろされ、爽に人をして爽快さといふ天辺の境地に立たせられる感がある。その頂上の南少し下方に五六間四方の窪んだ処は、高松の霊木の生えた処である。二代目の高松も今は切られて二抱えばかりの切り株があり、寸側に三代目の若い松は植ゑられて居る。

松の伝説に昔いつの頃であつたか、高松村に美人があつた。それが小野小町は秋田の小野村から召出され、泉式部は横川目村から召出された様に、宮廷に召出されて高松女御となつた。その女御によつて高松の霊木のこと天聴にも達し石の鳥居も奉納されたが、後に女御が病氣にかかり医薬のみならず、祈禱師や占師にもかゝつた処古い松の木の祟りと占われて、その高松を伐截せよとの勅命があり松の太木は伐截され

経ヶ森といふのがあつた。それは寺の東方に田を距て、真丸い森はそれである。天保六年(一八三五)に書いた二郡見聞私記に経ヶ森のことを左の様に書いて居る。  
「鏡音堂並に寺を今の鞍掛に移すこと年曆知れず。寺内の諸木を見るに、三四百年以前と見えたり。又鞍掛の坂の上より東を見るに、真丸なる山あり。之を経ヶ森といふ。昔高松寺繁昌の節、この山の頂に法花經一石一字書写して納めし処なり。依て経ヶ森といふとあり。この山の繞き西北の山下に矢沢村立石の金石工門といふ者の別家に助四郎といふ者ありしが、手跡算術も相応にて用ひられし男なり。寛延初年(一七四八)の頃とや。大雪の夜出家一人来り宿を乞ひけり。易き御事とて様々もてなしければ、終夜有がたきことを説き知らせければ、その夜あかしけり。翌朝飯後茶をのみ雪もはければ、暇乞して立ちけるに、門前へは出でずして、山の平に行きければ、助四郎申すには、さ様お出候へば経ヶ森へのほるなり、一向前へは道なき所なり。門前へ御出で大道をおこしあれと申しければ、大道へ出候も雪をふむ。戻るまじとて行きけり。助四郎せんかたなく出家の行ふを見届けけるに、何やらん光物眼にさばると覚え、眼をふるまゝに出家は見えず。足あとを見るに、山の半半途まで、上へも脇へも足あとなしとぞ。」

以上の如きことが記録に見えるが、明治初年になつて排仏毀釈の神仏混交を禁ぜられ、天台宗真言宗は大抵廃され、高松寺八幡寺妙泉寺成島寺も廢寺となつた。こうして高松寺も鎮守白山宮のみを残して廢寺の止むなきに至り、仏像弘法大師と興教大師とは矢沢の大畑のものとなり、不動明王と地藏菩薩は宝昌寺に移され、前机は矢沢抱持神社に移された。又茶の湯釜は川村健二氏の手に入り救護されて居る。

現在の観音堂は元は三間四面であつたが、昭和二十三年に一間半四面に改造された。本尊十一面観音は座像で蓮台とも三尺八寸五分あり徳川初期の作と云われている。

### 六 高松寺の住職

最初の高松寺の住職名は全然知るよしもないが、鞍掛に移転後の住職も亦詳かでない。徳川時代になって後代の住職は幸い観音堂の五枚の棟札などによつて知ることが出来た。その中で最も古いのは宝永五年(一七〇八)の春末という住職である。次は元文四年(一七三九)三月再建の棟札で別当法印光玄とある。光玄の位牌も残つていて表面には梵字阿字の下に法印撞大僧部光玄生位とあり、裏には延享元年子(一七四四)四月十九日高松寺奉了房とある。これは歿年月であらうか。光玄の師匠が先住かに宿尊という碑が見える。又寛政元年(一七八九)及寛政十一年(一七九九)には宿尊文化九年(一八一二)には宿尊次郎嘉永二年(一八四九)まで宿尊の弟子宿尊密の次は宿尊密の弟子麴伝次は麴伝の弟子であるが明治四年(一八七三)に復師し高松法印と云い白山神社の祭主となつた。宿尊密法印は寛政七年(一八二六)小倉掛中島家に生れ、高松寺宿尊密の弟子となり、勉学修行共にすぐれ人望ありて、師宿尊の後をつぎ高松寺の住職となつた。五十一才の時阿闍梨法印の位を受け、五十五才嘉永二年四月十四日と賀禪貫の真言宗の總寺八幡寺の住職に栄転した。後岳の妙泉寺に転じたが、明治四年九月一日七十七才で生家小倉掛に於て歿した。宿尊密の着用品たる袈裟衣及乘籠文書等が生家に保存されてある。宿尊密の弟子麴伝も高松寺住職から八幡寺に栄転したが、優秀な学才をそなへて毒殺されたといふことである。

八幡寺住職宿尊密の前の住職は宿尊といふ人で、この人も岳の妙泉寺に転じそれから成島寺に移つた。そのあとに宿尊は妙泉寺に転じたのである。次に南部家旧蔵の「寺社」一の巻に、

安永八己亥年(一七七九)九月七日 八幡寺

此度江戸触頭彌勤寺と法要の儀御座候ニ付末山高松寺使僧ニ為ニ差登一申度候間御座候下置度尤高松寺儀田舎報恩講數年相勤候ニ付初瀬表江為ニ入衆一學業之登山仕度之旨願出申候依之江戸表用事齊次第直ニ初瀬登山之任候様明後年春迄御暇被下度旨申上願之通被ニ仰付一寺社御奉行申渡候也

とあり、

又同一寺社一の巻に、

安永十辛丑年三月四日 八幡寺

当寺末寺高松寺儀去々年九月為衆入善之初瀬登山之儀願上當春迄御暇被下候未法修學相勤遊只今罷下候而も年數未滿ニて出世成就申ニも難ニ相成一候間明後年春迄在山法御暇被下度旨以末書永留寺申出願之通被仰付一寺社御奉行江申渡候

とあるは、宿尊密の師匠宿尊密の初瀬登山法修業の時の願届に關するもので、當時は高松寺は八幡寺の末寺とされてたことが分る。

### 七 高松寺の復活

高松の人渡辺春師青年の時より高松寺の復興を志し、まず五大尊光勝寺大僧都赤塚春天師の弟子となり、真言宗醍醐派を修行して一意布教に従事しつゝあり、四方より善男善女集まる様になり、幽邃閑雅清浄の地を選び、大正七年三月十五日御堂を建立し、如意堂教會を設立してその会長及担任教師となつた。大正十四年十一月二十五日高野山管長大僧正泉智等師より授花得伝大日如來忍海の受明灌頂を受け、昭和九

年十月十六日真言宗醍醐派修驗道常務支庁管理を特任された。又昭和二十一年十一月二十五日高松寺公称を許可され、同二十四年六月十五日平和子育観音像を安置した。そして同二十七年十一月十日には高松寺として本堂三間四面九坪敷地三十坪庫裏二間半に五間の二階建二十四坪五合宅地六十六坪となりこれを登記した。尚同月同日寄京師極少僧都に任命された。同二十八年六月二十一日には弘法大師並に理源大師を安置し、又古仏像元花卷城観音寺にあつた弘法大師丈尺八寸を盛岡市蓮正寺より譲受け、又不動尊丈三尺を志和村黄金堂より譲受け安置した。こうして寺内の諸尊も莊嚴に飾られ参詣者の信仰と法悦を高める様になつた。

次に本堂の周囲も亦自然の山林と岩石や湧水などありて四季の風致をそえ、こゝに参詣するものおのづから世の惱みを散じ清浄な仏心を悟らしめる尊とい道場を感じしめる。かく復活した新高松寺は宿尊密の熱誠なる布教により月々々々盛んになり現在信徒二百有余を得たのである。なお寄京師は古靈場高松寺の名勝を訪れる世の觀光客の爲には親切に案内説明に努められている。(昭三、九、一七調)

### 寺の鳥居

寺院の鎮守に鳥居があるのは当然のことであるが、大阪の四天王寺にはそのものに鳥居がある。後二条天皇乾元元年八月、ここに石鳥居を立てた(皇代記)。参拝しながら今に残る石鳥居を、気がつかずに過ぎる人も少なくないが、奥羽にはそんな例がないのか。岩手県には薬師神社といふものが実に沢山ある。県都盛岡だけでも浅岸の眞薬師を始め、中野、太田などに薬師神社があり、大抵少彦名命が祭神になつてゐる。(及川)

## 昭和三十一年平泉遺跡發掘調査概況

昭和三十年秋には、観自在王院跡第二次調査、毛越寺南大門、大泉池等の調査が行われ、同三十一年秋には、嘉祥寺跡、法華堂跡、大泉池、観自在王院跡補充調査が行われ、その結果を総観すると、次の事項が明かになつた。

### 一 観自在王院跡

第一次の調査で大、小阿彌陀堂の間に礎石三、その下層二尺五寸位の深さで、十八尺に十五尺という矩形の敷石群が見出された。編輯子はいち早く住宅址ならんことを推測して置いたが(本誌第三卷第五号)、第二次調査で更にその南方に掘立柱の跡らしい穴が二対(間隔六尺四、五寸)あらわれ、大阿彌陀堂の北側に二群の敷石と、礎石二基が出て来た。柱は舞鶴ヶ池または廻廊に關連あるもの如く、池の中で二本の橋脚も見出された。三十一年の第三次調査に於ても、ところどころ玉石の密集したもの、溝跡らしいものが見出された。この遺跡では鐘樓址が復合遺跡であることが知られているが、大小阿彌陀堂跡も、復合遺跡で住宅跡らしく思われるけれど、調査團では建物跡と判定するには資料が乏しいと逃げて断定を留保した。

### 二 大泉池

池の東側と中島の東側から、小石を岸辺に集めた洲浜が発見せられ、西岸は約五十尺埋立てられて居り、南岸洲浜状の低地を池尻にして水を落し、鐘樓堂東方十間位の石組み所が水の取入口で、その北方に溝跡がみだつて居た。中島は東西百三十尺、南北五十六尺で約二百坪、石敷があり土師器が掘出されたが建造物はなかつた。南大門内側の二列の礎石に結びついて中島を経て幅十二尺、長さ九十二尺の橋がかかれ、橋脚は十二本、八尺間隔で、中央の船の通る所だけ十二尺の間隔にしてあつた。そしてその北端は、金堂四隣寺跡の礎石に結びつく一直

### 四 嘉祥寺跡

その規模はケタ行(間口)七間約九十二尺、ハリ間(奥行)六間約七十四尺、中央三間に二間を内陣とし、その外を外陣、更に裳階がとりまいていた美しい建築であつた。基礎は土を盛り玉石で固めたならかな板敷式で、從つて床は板張りであり、堂の東西に翼廊跡が見つかつたが、どう延びてどこで終つたかは明かでない。堂跡からクギ、焼壁の外に、朱、群青、金はく、漆塗の破片もあらわれ、壯麗の状がうかがわれた。復合遺跡らしくないので、慈覺大師創建藤原基衡再建といふ伝を証明するよりも、基衡建立説に傾いたかに取沙汰せられた。

### 五 法華堂跡

法華堂跡と依る土壇は常行堂の東にあつて壇上に礎石が数個露出、現在の常行堂は享保年間の建築で、元の位置に再建したものと考へられたもので、法華、常行兩堂は南面して東西に並ぶものとされてた。然し調査の結果、法華堂跡土

### 一 毛越寺南大門

大泉池の南岸にある十二基の礎石を手がかりに調査の結果、正面ケタ行三間三十九尺、奥行二間二十四尺の門が、東西五十六尺、南北(奥行)四十四尺の基礎

の上に立ち、基礎の東西に基底幅十尺の築地土塀の跡が連続し、塀の外側にはこれ幅十二尺の犬走り(歩道)があつた。そして基礎の前端に当り地下一尺にして一尺五寸位に敷きつめられた根石が出て来た。これは年中行事巻に見えるような檜皮の扉をうけたものか、後世の階加か明かでない。門の内側には、仁王の座石も発見せられ、厚さ十尺の土(築地)塀は、平泉の特色と称せられた。

### 奇妙な苗木

いづれや話の泉の放送によるもの、似類のものは沢山ある。一寸八分(一尺八寸) カマツカ  
一合半 コナガラ  
二合 ミズカイ  
三合 フタヌキ  
四月朔日 ゴイシ  
五月 日 ムタカ  
六月 日 ナカマド  
七月 日 ヤトヤマ  
八月 日 イチヂク  
九月 日 モモキ  
仙台藩では砂金(イサゴ)小川内(オコウジ)伝法(ツノリ)、四十九院(ツルシ)、新妻(ニツツマ)、八月朔日(ホズミ)、白極(ハクゴク)、前山河(マエダコ)など、なかなか読み難いものである。